

[研究ノート]

心の概念の概念工学としての「拡張された心理論」

神崎 祥輝

認知症患者は失われた記憶内容に関する信念をもつのか。〈Xは心的状態Mをもつのか〉というタイプの問いは、〈心とは何か〉という問いと表裏一体に、長らく哲学者や科学者を悩ませてきた。しかし真に問うべきは〈心の概念はどうあるべきか〉であると、私は考える。

拡張された心理論 (Extended Mind Theory、以下 EMT) も、〈心とは何か〉という問いの解決を目指す認知科学理論とされてきた。提唱者の D. Chalmers と A. Clark によれば、心は脳に閉じているのではなく、外的環境へ拡張されている。たとえばスマートフォンは、所有者の心の機能を代替し、心を部分的に構成しているといえる。EMT は認知科学への貢献が評価される一方、根強い批判も存在する。したがって、EMT に端を発する認知科学の論争に決着をつけるには、〈心とは何か〉という難問に向き合わなければならないことになる。そこで本稿では EMT を、心についての認知科学理論ではなく、〈心〉の概念についての概念工学に再定位することで、科学的探究と別の社会規範として捉え直す。概念工学は、H. Cappelen や Chalmers が旗振り役の新たな哲学方法論であり、概念の記述分析を目指す伝統的な方法論と異なり、新規概念の創造や既存概念の修繕を目指す。EMT の提唱者の Chalmers は概念工学の擁護者でもあるが、EMT を概念工学に含めることに懐疑的であり、EMT の帰属先を科学と工学の間で曖昧にさせている。

本稿では Chalmers と Cappelen を比較し、Chalmers が EMT を概念工学に含めない理由が、概念工学の本質を新規概念の創造とする Chalmers の特異な概念工学観に由来すると診断する。次に、概念工学の本質を既存概念の修理とする Cappelen に依拠しつつ、なお EMT を概念工学とみる根拠を示し、EMT と認知科学を決別させる。最後に、EMT を概念工学に含める利点を述べる。

第1節 EMT とは何か

本節ではまず EMT について説明する。続いて EMT への批判と、Clark と Chalmers の応答を確認し、心の環境への拡張のための基準を洗い出す。

Clark と Chalmers によれば、心と独立に存在する外的環境が内的な心的表象と同様の機能を果たすとき、その環境は心の一部を形成しているという意味で〈拡張〉された心とみなせる (Clark and Chalmers 1998, 8)。心の環境への拡張事例として彼らが挙げるのが、以下の思考実験で展開される信念の EMT である⁽¹⁾ (Clark and Chalmers 1998, 12)。

- (1) Inga は、MoMA で開催される展覧会のことを耳にした。彼女はその展覧会を訪れることを決めた。美術館が53番街に位置していることを思い出し、歩いて美術館へ辿り着いた。

上のケースにおいて Inga は〈MoMA は53番街にある〉という信念を抱いており、彼女が自身

の記憶を参照する前から既にこの信念をもっていたことは明らかだろう。MoMA に関する信念は記憶の中で、Inga の意識によってアクセスされるのを待っていたのだ。では次のケースはどうか (Clark and Chalmers 1998, 12-13)。

- (2) Otto は認知症に苛まれており、自身の脳内記憶の代わりとしてノートに常に携帯している。彼は新たな情報を得るたび、それをノートに記録する。Otto は、MoMA で開催される展覧会のことを耳にした。彼はその展覧会を訪れることを決めた。自身のノートを参照し、そこに〈美術館は53番街にある〉と書かれていたので、歩いて美術館へと辿り着いた。

2 番目のケースで Otto が53番街まで歩いたのは、〈MoMA を訪れたい〉と欲すると同時に〈MoMA は53番街にある〉と信じていたからだ。そうだとすれば、Inga が彼女の脳内記憶を参照する以前から〈MoMA は53番街にある〉という信念を保持していたと同様に、Otto もまた彼のノートを参照する以前から〈MoMA は53番街にある〉という信念を保持していたと Clark と Chalmers は主張する。つまり参照される情報が身体内にあるか外にあるかという点を除き、脳内記憶もノートも、信念を構成する機能を等しく担う。Clark と Chalmers によれば、同じ機能的役割を担うにも関わらず、情報の存在位置により説明図式を変えるのは、不必要な複雑化である (Clark and Chalmers 1998, 13)。両者はより簡潔に説明可能なのだ。

ここで EMT に対し、脳内情報と環境内情報のアクセスの容易さの違いに依拠した反論が想定される⁽²⁾。つまり、Inga はいつでも安定して自身の脳内記憶を参照できる一方、Otto は彼のノートを紛失したり内容を読み間違えるリスクがあるため、同じ機能を果たしていない。Clark と Chalmers はこの批判に対し、以下のように応答する (Clark and Chalmers 1998, 15)。もし Otto のノートが大抵は信頼に足る形でアクセス可能なら、時に信頼性やアクセス可能性が損なわれようと問題にならない。なぜなら通常の脳内記憶も、外傷や酩酊などに伴い信頼性やアクセス可能性を損なうことがあるからだ。つまり、通常の脳内記憶も、〈大抵は信頼に足る形で容易にアクセス可能〉にすぎない点は、ノートと変わらない。すなわち信頼可能性の基準からいえば、脳と外的環境は機能的に同等である。

以上で、Clark と Chalmers による EMT 擁護の方針を確認した。ただし擁護成功の可否に、F. Adams and K. Aizawa (2001) は懐疑を向ける。Adams と Aizawa の EMT 批判の要諦は、認知や心は環境に拡張されず脳内に留まる、という従来の認知観の擁護である。ただし認知と非認知の区別に脳の内外の区別は利用できない以上、従来の認知観を擁護するには、別の区別に依拠しつつ EMT を批判しなければならない。そこで Adams と Aizawa は、認知的特徴 (Mark of the Cognitive) の有無によって区別する (Adams and Aizawa 2001, 48)。Adams と Aizawa によれば、対象が認知的特徴を備えていると言えるためには、以下の二つの条件を共に満たさなければならない。しかし、EMT が拡張された認知として捉える外的環境は、これらを満たさない。

- (1) 非派生的内容 (non-derived content) を含む。
- (2) 因果的に単一なメカニズムとして個別化される。

これらの意味を順に見よう。まず、何かが非派生的内容を含むとは、それがもつ意味内容が「派生的」でないということだ。派生的内容は、慣習的連関や社会的合意に基づいて社会的に構築される意味内容である。たとえば、石板上に刻まれたヒエログリフが特定の対象を、〈7〉というアラビア数字が7という特定の数を表すのはなぜかという、我々の社会がそう取り決めたからである。つまり、文字や数字の意味内容は、人がもつ表象能力に由来する。他方で非派生的内容は、慣習や社会規範に由来しない意味内容だ。たとえば認知主体の抱く〈雨が降っている〉という知覚や信念、そして経験の内容は、社会的取り決めや他の認知主体の表象能力に規定されない。もし規定されているなら、たとえば私が〈雨が降っている〉という思考を抱くのは、あくまで私の思考がそのような意味内容をもつことを可能にさせる規則の類や別の認知主体が存在するからだということになるが、これは思考の意味内容の決定プロセスとして反直観的である⁽³⁾。心についての常識的な理解に基づけば、私の脳状態が〈雨が降っている〉という事態を表象するのは、私の脳状態がもつ表象能力のおかげであり、他の表象能力に由来しない。この意味で、認知は非派生的内容を含む。

そして第二に、認知的特徴をもつものは、因果的に単一なメカニズムとして個別化される必要がある。つまり、それはかたや脳内神経発火メカニズムによって説明され、他方で筋肉収縮運動メカニズムによっても説明可能、と入り混じってはならない(Adams and Aizawa 2001, 51)。Adams と Aizawa による因果的個別化の批判の要諦は、Clark と Chalmers は神経発火や筋収縮運動のように異なるメカニズムが〈認知〉や〈心〉という単一の自然種を構築するとみなし、それらに共通する因果的基盤を探索する誤謬を犯している、というものだ。

ここで、前節で Clark と Chalmers が挙げていた、EMT に対する懐疑と彼らの応答を再確認する。EMT への懐疑は、〈外的環境は認知主体がアクセス不可能になることがあるため、脳内の認知プロセスと同等に信頼可能とは言えない〉というものだった。対する彼らの応答は、〈脳内の認知プロセスも外的環境と同様に認知主体がアクセス不可能になることがあるため、外的環境も脳内の認知プロセスと同等の認識的な信頼可能性を有する〉というものだ。外的環境と脳内の認知プロセスが同等に機能することを根拠に EMT が擁護されれば、EMT は心についての簡潔な説明力を得る。

以上の Clark と Chalmers の主張を、簡潔性テーゼと名付けよう。既に確認した非派生的内容と因果的な個別化に基づく Adams と Aizawa の議論は、Clark と Chalmers の掲げる簡潔性テーゼに対する反論である。因果的な個別化に依拠した Adams と Aizawa の議論に基づけば、現象を基礎付ける因果的メカニズムの違いを無視した極端に簡潔な EMT は、あらゆる現象が認知的現象になることを帰結しかねない(Adams and Aizawa 2001, 57)。その結果、〈認知〉概念がその外延に全てを含むなら、〈認知〉概念は概念としての意義を失う。しかし、Clark と Chalmers も〈認知〉や〈心〉という概念に依拠する以上、概念が機能不全に陥る事態は避けたいはずだ。よって EMT は認知と非認知の科学的な区別を要求しているはずだが、それがどのような基準に基づくものなのかは不明である。よって Clark と Chalmers は、具体的な区別の基準を打ち立てられておらず、EMT は失敗したプロジェクトである。そして諸々の経験的証拠に基づけば、因果的に個別化された認知と非認知の境界は、脳の内外という境界に「偶然」一致している、というのが Adams と Aizawa の見立てである(Adams and Aizawa 2001, 53)。

非派生的内容に基づく反論も、Otto と Inga のケースが統一的に説明可能という、簡潔性テー

ぜに対する疑念を投げている。認知症の Otto が彼のノートを参照するとき、Otto のノートに書かれた文字列の表象内容は派生的内容でしかない。他方、Inga が自身の脳内記憶を参照するとき、Inga が想起する記憶は、非派生的内容をもつ。こうした差異を無視し、単に外見上の差異がみられないことを理由に両者を同等と単純化するの、誤謬である (Adams and Aizawa 2001, 56)。

認知科学理論としての EMT に対する Adams と Aizawa の批判は確かに妥当である。というのも、〈EMT は、単に現象ないし行動としての見かけに重要な差異がないことを根拠に諸現象を単一カテゴリーにまとめ、科学理論としての簡潔さを謳っている〉という Adams と Aizawa の指摘の通り、EMT はやや論点先取的な側面が見受けられるからだ。なぜなら本来、科学理論 T がその簡潔性によって評価される際、T の簡潔性は第一目的には置かれていない。T の簡潔性は、〈説明対象に共通する因果的基盤を同定可能〉という、T の説明力の強さに由来する。つまり EMT の簡潔さが理論的美徳として評価されるためには、〈非派生的内容をもつ脳内での表象操作と、派生的内容をもつ環境中での表象操作に共通する、因果的基盤を同定可能〉な説明力を EMT が示さなければならない。しかし、EMT が十分な説明力を示せるか否かを、現時点の認知科学の水準に照らして判断することはできないと思われる⁽⁴⁾。

たしかに EMT は、認知と非認知を区別する科学的な方法論を提供していない。しかしそれ故に直ちに EMT は荒唐無稽ということにはならないだろう。Adams と Aizawa の結論は、〈既存の科学的証拠に照らせば、認知は「偶然にも」脳内に留まっていると現時点では言わざるをえない〉という、留保付きの消極的なものである (Adams and Aizawa 2001, 53)。なにより、EMT は認知と非認知を区別する基準を全くもたないわけではない。この点に、Clark と Chalmers の EMT が単なる科学的探究に回収されない理由がある。EMT は科学とは別の基準を用いることで、認知と非認知を区別する。Clark and Chalmers (1998) の末尾には、これを示す一節がある。

心についての哲学的見解と認知科学研究の方法論への帰結は明らかである。しかし、倫理的かつ社会的領域への影響もまた存在する。たとえば、誰かの有する環境に干渉することが、その人自身に干渉する場合と同等の倫理的な重要性をもつケースがあるかもしれない。こうした見解が真面目に受け取られるならば、特定の形式の社会的活動は、コミュニケーションや行動というよりもむしろ思考に近いものとして再解釈されうる。(Clark and Chalmers 1998, 18)

Clark と Chalmers の企図はより良い社会の構築を目指した規範的側面を含む。ここで Clark と Chalmers が提案するのは、環境への第三者の介入行為を、思考への介入行為と捉え直してはどうか、というものである。EMT には様々な応用可能性がある。たとえば認知症患者にもノートの使用を通じて正常な信念形成を認めることが可能になるかもしれない⁽⁵⁾。次節では、EMT を規範的なアプローチとして再定位するなかで、概念工学として位置付ける。まず概念工学について概説し、次に EMT が概念工学である理由を説明する。

第2節 概念工学とは何か

前節で見たように、EMT を認知科学理論として擁護可能か否かは、現在の認知科学では判断できない。そこで本節では、EMT を〈心〉の概念の概念工学を目指す規範的プロジェクトとして再定位する。まず概念工学がどのような作業であり、何を目的とするのかを、戸田山和久による整理を基に確認する。2.1でみるように、概念工学者の Cappelen と Chalmers には共通基盤が存在する一方、2.2でみるように、無視できない差異も存在する。2.3では、Cappelen の基準では EMT を概念工学として取り扱えるものの課題が残り、Chalmers の基準では EMT を概念工学として取り扱えないことを論ずる。続いて、EMT を Cappelen と Chalmers の折衷的な概念工学として位置付け、概念工学として EMT を取り扱うべき理由を説明する。

2.1 概念工学の進め方

概念工学は、概念を工学する哲学の方法論である。概念工学者の Cappelen は、〈概念〉を固有の外延と内包をもつ表象デバイスと捉える (Cappelen 2018, 44)。Chalmers は〈概念〉概念の定義に明示的に言及していないが、概念工学をめぐる Cappelen との応酬の中で彼の〈概念〉概念の定義について明示的には反対していないため、上記の定式化に概ね同意するだろう。また、戸田山和久によれば工学とは、有益な人工物の設計を通して人類の幸福に貢献しようとする営みである (戸田山 2019, 3)。この人工物の外延にはマテリアルな技術産品だけでなく、概念も含まれる (戸田山 2019, 4)。

では、概念工学はいかに達成されるのだろうか。Cappelen によれば、概念工学は以下の三段階から構成される (Cappelen and Plunkett 2020, 3)。

- (1) (既存の) 概念の評価段階⁽⁶⁾。
- (2) その概念の改善方法についての、反省と提案の段階。
- (3) 改善提案の社会的実装を試みる段階。

Chalmers も (1) 設計段階、(2) 評価段階、(3) 実装段階と、Cappelen と親和的な区分をしている。同様に戸田山の概念工学も (1) 分析と評価、(2) 改定、(3) 社会実装という三段階に弁別可能であることが、植原亮によって指摘されている (植原 2020, 263)。概念工学の大枠の流れに関しては、共通見解が取れていると考えてよい。

2.2 2種類の概念工学

前節では、Cappelen と Chalmers の概念工学の共通部分に着目し、概念工学のコアとなる要素を抽出した。それは、既存概念を分析評価し、改定概念を実装導入するという一連の流れである。しかし他方で、概念工学のスタンスは Cappelen と Chalmers で異なる。Cappelen は既存概念の修理で問題解決を志向する一方、Chalmers は既存概念に代わる新たな概念の創造を通じた問題解決を志向する。以下では、Cappelen と Chalmers の概念工学に固有な特徴を検討する。

Cappelen の概念工学が既存概念の修理作業であることは、Cappelen (2018) の『言語を修理する』(原題 “Fixing Language”) というタイトルからも明らかだ。Cappelen and Plunkett (2020)

では S. Haslanger (2000) の〈女性〉概念の改訂作業をはじめ、Cappelen が概念工学とみなす様々な例が哲学史から引用される (Cappelen and Plunkett 2020, 6)。本稿の主題である Chalmers と Clark の EMT も、Cappelen によれば概念工学に含まれる (Cappelen 2018, 10-11)。つまり Cappelen にとって概念工学は、哲学が長く従事してきた作業であり、哲学が概念と必然的に関わる以上、哲学にとって根本的なものである (Cappelen and Plunkett 2020, 4)。

ただし Cappelen が具体例に挙げる〈女性〉概念が Haslanger による概念工学以前からも存在しているように、Cappelen の概念工学では、一から新規概念を作ることは企図されない。Cappelen の概念工学はあくまで、社会で既に運用されている概念の改定作業にすぎない。こうした保守的な概念工学の問題点については、2.3 で検討する。

他方で Chalmers の概念工学には、Cappelen との違いが見受けられる。たしかに Chalmers も Cappelen と同様に、概念工学の例を哲学史から引用し、概念工学をこれまでの哲学と地続きに捉える。しかし Chalmers は、〈スーパーヴィーニエンス〉概念などを参照し、これらの概念は、哲学者が創造した新規概念と解釈する (Chalmers 2020, 4)。この新規概念の創造こそ、Chalmers は概念工学の本質とみなす⁽⁷⁾。

Chalmers が修理的な概念工学よりも創造的な概念工学を重視する理由は、概念多元主義という、Chalmers が依拠する固有の見解による (Chalmers 2020, 13-14)。概念多元主義は、既存概念と新規概念の共存を許容する。Chalmers によれば、Haslanger が糾弾するように既存の〈女性〉概念が欠陥を抱えていても、それは社会学研究など特定の目的から対象概念を評価した場合にすぎない (Chalmers 2020, 13)。よって、既存の〈女性〉概念が医療目的などでは依然有用であるように、その概念を捨て去る必要はない。つまり、諸概念はそれぞれ異なる目的に利する以上、それらを全て保存するのが適切な概念運用である。このような概念多元主義は、改訂概念が既存概念を淘汰する Cappelen の修理的プロジェクトよりも、新規概念と既存概念の併存を許容する Chalmers の創造的プロジェクトと相性がよい。

2.3 概念工学としての EMT

以下では、Cappelen と Chalmers の概念工学の差異を踏まえ、EMT を概念工学として再定位する。Chalmers (2020) では、自身の EMT について、以下の言及が見られる。

…私たちはこれを概念工学と捉えていたかということ、そうではない。私たちの見解は、信念の拡張ケースは文字通り信念であるというものだった。つまり「信念」という言葉は、おそらくこのカテゴリーがもつ統一性と説明の豊かさによって既にこれらをカバーしている。…Andy [=Clark] と私は、拡張されたケースをすべてカバーするために「e-belief」という新しい用語を導入することもできたし、e-belief が通常の信じるケースといかに統一され、いかに重要な役割を果たしているかについて主張することもできた [そうすることも可能だがしなかった]。(Chalmers 2020, 7-8, [] 内は筆者補足)。

このように Chalmers は、EMT を概念工学とみなさない。EMT が試みたのは、〈拡張された信念 (e-belief)〉という新規概念と既存の〈信念 (belief)〉概念の並立でも、〈拡張された信念〉概念による既存の〈信念〉概念の代替でもないからだ。Chalmers にとって EMT は、既存の〈信

念〉概念の最良仮説であった。ゆえに、Cappelen の概念工学にも Chalmers の概念工学にも EMT は該当しない。

ただし、既存概念の修理作業を概念工学の本質とみなす Cappelen (2018) は、EMT を概念工学に含める (Cappelen 2018, 10-11)。しかし、Cappelen 的な概念工学として EMT を再定位するだけでは、認知科学の EMT をめぐる問題が生じる。というのも、Cappelen の概念工学が既存概念と改訂概念の連続性を重視する以上、既存概念と結びついた説明課題を改訂概念も引き継ぐからだ。つまり、Cappelen 的な概念工学として EMT を捉えた場合、認知科学としての EMT と同様、Adams と Aizawa による批判への応答義務が生じる。なぜなら、既存の〈信念〉概念に代わる改訂された〈信念〉概念として〈e-belief〉を選択する際には、両概念のいずれが〈信念〉概念として優れているかを判定するために、既存の認知科学が参照されるからだ。現に、認知科学における経験的証拠を傍証に EMT を批判する Adams と Aizawa のみならず、実践的な規範性から EMT を擁護する Clark と Chalmers でさえ、認知科学の経験的証拠によって EMT を裏付けることを目指していた。

とはいえ、新規概念を創造する Chalmers 的な概念工学を EMT にそのまま採用することもできない。Clark と Chalmers は〈e-belief〉という新規概念を創造したわけではないからだ。ただし概念工学は Cappelen か Chalmers かという二者択一に尽きるわけではないだろう。本稿では、EMT を Cappelen と Chalmers の概念工学の折衷案として再定位する。つまり、EMT を既存の〈心〉概念を改訂する Cappelen 的な概念工学とみなしつつ、既存の〈心〉概念とその改訂版である〈拡張された心〉概念の併存を許容する Chalmers 的な概念多元主義も採用する。Chalmers もこの立場を受け入れるはずである。なぜなら、そもそも Chalmers の概念工学が全くゼロから新規概念を創造できるのかは疑わしく、既存概念の改訂と概念多元主義を実質的に両立させているからだ。たとえば Chalmers が概念工学の例にあげる〈スーパーヴィーニエンス〉概念が創造される以前から G.E. Moore は、〈二つの事物がその内在的性質の違いなしに質的に違うことはありえない〉という、後の〈スーパーヴィーニエンス〉概念に繋がるテーゼを打ち立てていた。歴史的起源をもたずゼロから新規概念を創造することが原理的に不可能なのだ。Chalmers の概念工学の本質的な企図もそこにはない可能性がある。Cappelen の修理的な概念工学との対比で Chalmers が強調したいのは、〈新規概念を創造する〉ことではなく、〈既存概念と新規概念を併存させる〉ことではないだろうか⁽⁸⁾。つまり Cappelen と Chalmers の対立は、既存概念を捨てて新規概念のみを残すか、既存概念と新規概念を併存させるか、という点だと考えられる。

本稿の解釈では、Cappelen 的な概念工学は Chalmers が依拠する概念多元主義と両立できる。むしろ、Cappelen の改訂的な概念工学の規範性を伴うことで、概念多元主義は実行できるだろう。既存の〈信念〉概念とその改訂版の〈拡張された信念〉概念が併存できるのは、両者に信頼可能な表象利用という共通性があるからだ。そして信頼可能な表象利用という共通点は、〈諸々の行動が同じ目的を達成しているならば、それらは同じ機能をもつとみなすべき〉という規範的前提に支えられる。このように、規範的前提に支えられた共通点を想定することで、概念多元主義は十分に実行可能となる⁽⁹⁾。

EMT をこのような形で概念工学に含めることには以下の利点がある。まず環境を利用する状況下で、従来の認知観で認知能力をもたないとされた対象にも認知能力を帰属可能になる。次に本稿の提案は、認知科学理論としての EMT の説明力を要請しないため、Adams と Aizawa の

批判に抵触しない。また、EMT を概念工学に含めることで、Cappelen と Chalmers の概念工学を調停する道が開かれた。EMT は、概念の修理と創造の中間に位置づけることができる。概念の修理も創造も、同じ概念工学という地続きの作業として捉えられるべきである。

注

- (1) Clark と Chalmers は、信念のほか、欲求や情動など心的状態一般が環境に拡張可能と主張する (Clark and Chalmers 1998, 12)。しかし、本稿では信念の EMT に議論の射程を限定する。
- (2) ここで挙げた反論と別に、以下のような反論も想定される。信念は意識的な心的状態であると通常考えられるが、拡張された信念はせいぜい無意識な心的状態である。よって拡張された信念を通常の信念と同一視はできない。しかし Clark と Chalmers が反論するように、信念が意識的経験を常に伴うと断ずるのは早急である。Clark と Chalmers によれば、〈(信念は意識的な心的状態なので) Otto のノートは彼の (拡張された) 信念ではない〉という我々の直観は、〈(真正の信念は顕在的な信念に限られる)〉という判断に由来する (Clark and Chalmers 1998, 16)。顕在的な信念は、その場において利用可能な信念であり、かつ行為者がそれについて意識的な信念に限る。よって、顕在的な信念のみを真正な信念として認める立場からは、Otto のノートは信念といえない。ただしその場合、我々がもつ他の信念の多くも真正な信念といえないことになる。なぜなら、我々は自ら保有する諸々の信念に対して常に意識的ではないからである。
- (3) D. Dennett のような解釈主義者は、そのように心的内容が決定されると考える。Adams と Aizawa も解釈主義の論調に言及しつつ、それは認知科学にとって有効な選択肢でないと退ける (Adams and Aizawa 2001, 49)。
- (4) 認知科学としての EMT 論争が、我々の手持ちの科学で未だ調停不可能と考えられる理由は次の通りだ。脳内表象と環境内表象に共通する因果的基盤の同定タスクは、〈心はいかに意味内容をもちうるようになったのか〉という進化論的な起源を巡る問いに回帰する。そして本稿で論証を詳細に追うことはできないが、この問いは〈心とは何か〉という心の哲学のハード・プロブレムに回帰するためである。また、そもそも以上の説明課題を EMT に対して課すことが正当なのか、正当ならそれはなぜかを論証する必要もあろうが、本稿で詳細な検討はできない。
- (5) EMT に依拠せず当該の心的状態の機能が擁護可能である、という反論があるかもしれない。認知症患者がノートを参照することで MoMA に関する信念をもてるのは、ノートが認知症患者の拡張された信念であるからではなく、それ自体は信念でも拡張された信念でもないノートを参照することで、MoMA に関する信念をもてるようになるからだという、穏当な見解で十分ではないかと。しかしこの見解では、健常者の信念と (道具に依拠せざるをえない) 認知症患者の信念の間に、真正性の格差が存在する。EMT の真価は平等主義的な発想に基づいて、両者を全く同じ信念を抱く主体として取り扱う点にあるのではないだろうか。従来の認知観に基づいた認知症のケアは、患者に脳トレなどのリハビリを促し、〈正常な〉心的機能を回復させようとするかもしれない。他方で EMT に基づいた認知症のケアは、患者にノートなどの道具の積極的な使用を促したり、効果的な利用方法の教育を通じて、〈拡張された〉心的機能の獲得へと向かわせうる。
- (6) 原文では〈概念〉ではなく〈表象デバイス〉と記載 (Cappelen and Plunkett 2020, 3)。Cappelen が〈概念〉という用語を避けるのは、Cappelen の概念工学は概念のみに関わるわけではないことに加え、そもそも〈概念〉概念に関する言語哲学上の共通見解がないからである (Cappelen and Plunkett 2020, 3)。
- (7) なお、Chalmers も Cappelen の概念工学観との違いについては自覚的であり、Cappelen の修理的プロジェクトも概念工学に含まれるが、創造的プロジェクトの方が重要と強調する (Chalmers 2020, 5-6)。

- (8) この見解は、吉沢文武氏から助言頂いた。
- (9) 同様の論点として、Cappelen は Chalmers の概念多元主義を以下のように批判する。Chalmers によれば、たとえば〈自由意志1〉と〈自由意志2〉という概念のどちらが本当の〈自由意志〉概念か、という問いは意味を成さない。しかし Chalmers に対して Cappelen は、以上の問いは二つの理由から有効であると反論する (Cappelen 2018, 191-193)。第一に、Cappelen によれば Chalmers の見解は、概念工学の営みを説明できない点に問題がある。というのも、概念はどうあるべきかを問う概念工学は、明らかに (少なくともその工学主体にとっての) 本当の概念の獲得を目指しているからである。第二に、Chalmers の概念多元主義は添字抜きの本当の概念をそもそも前提しないと破綻する、という問題もある。なぜなら、〈自由意志1〉や〈自由意志2〉を〈自由意志〉の概念クラスタに含めるためには、他ならぬ添字抜きの〈自由意志〉概念を前提せねばならないはずだからだ。よって Cappelen の見立てでは、Chalmers の概念多元主義がまともな見解ならば、(Chalmers は否定するが) 添字抜きの本当の概念を前提し、それに関係する概念 (〈自由意志1〉〈自由意志2〉…) と無関係な概念 (〈花子〉〈太郎〉…) の弁別基準も暗黙裏に導入している (Cappelen 2018, 191-193)。

参考文献

- (1) Adams, F. and Aizawa, K. (2001) The Bounds of Cognition, *Philosophical Psychology*, 14-1, 43-64.
- (2) Cappelen, H. (2018) *Fixing Language: An Essay on Conceptual Engineering*, Oxford University Press.
- (3) Cappelen, H. and Plunkett, D. (2020) Introduction: A Guided Tour of Conceptual Engineering and Conceptual Ethics, in Burgess, A., Cappelen, H. and Plunkett, D., *Conceptual Engineering and Conceptual Ethics*, Oxford University Press.
- (4) Chalmers, D. (2020) What is Conceptual Engineering and What Should it Be? *Inquiry*, 1-18. Advance online publication. <https://doi.org/10.1080/0020174X.2020.1817141>
- (5) Clark, A. and Chalmers, D. (1998) The Extended Mind, *Analysis*, 58-1, 7-19.
- (6) Haslanger, S. (2000) Gender and race: (what) are they? (what) do we want them to be?, *Noûs* 34-1, 31-55.
- (7) 植原亮 (2020) 日本発の概念工学は実行に移せるか? : 戸田山和久・唐沢かおり編『〈概念工学〉宣言!』評, 『科学哲学』53-2, 259-273.
- (8) 戸田山和久・唐沢かおり編 (2019) 『概念工学宣言! : 哲学×心理学による知のエンジニアリング』, 名古屋大学出版会.

[査読を含む審査を経て、2024年4月22日掲載決定]

(一橋大学大学院社会学研究科修士課程)